校長室だより～燦燦～ №８２

復活の日

2020.3.17

高校生のとき、友人と映画館に行きある映画を見た。その頃は、入場料を払うと、一日中映画館にいることができた。繰り返し同じ映画を見ることができた。高校の私の同級生の中には、朝から晩まで最前列で映画を見ている者もいた。最前列では、かえって見にくいと思うのだが。また、同時上映というものがあった。お目当ての映画を見に行くのだが、その映画が上映される前に違う作品を見ることができた。昔のレコードで言えば、Ａ面とＢ面のようなものだろうか。

ある映画とは「復活の日」という作品である。なぜか今でも記憶に残っている。今から４０年前も前の作品である。ＳＦ作家の小松左京氏が１９６４年に発表した作品が原作となっている。１９６４年と言えば東京オリンピックが開催された年である。

この映画は、１９８０年６月に公開されている。ボロを身にまとい、無精ひげの若き草刈正雄が主人公である。人為的につくられたウイルス「ＭＭ－８８」をめぐり、冷戦中の東西各国が奪い合いを続ける中、不慮の事故でこのウイルスがヨーロッパにまき散らされてしまう。

急速に感染が拡大したウイルスだが、当初は「イタリア風邪」と名付けられ、ウイルスであることは隠されていた。春を迎えるとウイルスはさらに活発化し、人類はあっという間に滅亡の危機に瀕する。残されたのは南極に残る約８００人ほどの各国基地の越冬隊だけとなる。

物語は、そこに核ミサイルの恐怖なども重なっていく。イタリア風邪が世界中に広がっていく恐ろしい展開は、まさに現在の状況と重なるところがある。作品では、草刈正雄が北米から南米そして南極へとひたすら歩いていくうちにボロを身にまとい、無精ひげの姿となる。ついには、オリビア・ハッセーが待つ南極へと辿り着く。

多感な思春期であった高校生のときに見たから覚えているのだろうか。草刈正雄があれだけの距離を歩くのはあり得ないとしても、きっとこの作品の設定は近い将来起こり得ることだと思って若き高校生は、この作品を見ていたのではなかろうか。実際、核ミサイルの恐怖は一時期、現実のものとなる一歩手前までいったことがある。そして、その恐怖は今も続いている。

感染症も今回の新型コロナウイルスが初めてではない。過去にも何度もあった。今、もう一度「復活の日」を見たらどのように感じるのだろうか。小松左京氏の原作は前回の東京オリンピックの年である。５６年経って映画の内容が現実味を帯びてきたと同時に、二度目の東京オリンピックが開催できるかどうかの危機に直面している現状は皮肉と言うべきか、巡り合わせと言うべきか。

ＳＦとは、サイエンス・フィクションである。フィクションとは、虚構であり、作り話である。だが、フィクションがノンフィクションになりつつあるのが現代なのではないか。昔のＳＦ作品は人間への警鐘だったのか。きっと昔から人類は、こうなるだろうとは思ってきたのである。だが、本当にそうならないと行動しないのも人間である。

一時代を築いたＳＦ作家の小松左京氏の代表作をご存じだろうか。その作品のタイトルは「日本沈没」である。架空の話で終わればいいが、ひたひたと現実味を帯びてきていると感じるのがまっとうな人間なのではないか。東日本大震災をきっかけとするべきである。十分すぎるほどのきっかけを我々は与えられたと捉えるべきであろう。震災後１０年目になる。そろそろ抜本的な対策を考える時期にきているように感じるのは私だけではないだろう。手遅れにならないように。